

佐多稻子全集

第九卷
齒車

佐多稲子全集

第九卷／齒車

講談社

佐多稲子全集 第九卷



昭和五十三年八月二十日第一刷発行
昭和五十四年九月十四日第二刷発行

著者／佐多稲子

発行者／野間省一

発行所／株式会社講談社 東京都文京区音羽二―二―二一 郵便番号 一一二

電話／東京（〇三）九四五―一一一（大代表） 振替東京八一三九三〇

印刷所／豊国印刷株式会社

製本所／藤沢製本株式会社

定価／二八〇〇円

©佐多稲子 昭和五十三年 著者本・乱丁本はお取り替えます。 Printed in Japan

目次

意識	若い意欲	街の中	少女と父親	身を灼く女	*	齒車
295	281	268	259	242		7

仲間
306

夜の記憶
318

注解
334

初出誌紙・発表年月
337

佐多稲子全集

第九卷

齒車

捨て鐘

帝大病院の施療分娩室には、向い側に二台、こちら側に三台のベッドが、足を向い合せにおかれていた。

明子は今、三台のまん中のベッドに仕度をして横になると、もうまかせ切った安心が甘く彼女をとらえ、迫ってくる緊張を抱き込むようにして診察を受けた。夜の九時過ぎだったから、外の廊下とそれにつづく病室のあたりはひっそりして、分娩室の中だけ白っぽい灯りに照らされていた。明子のほかに二人の産婦がいて、そのひとり出産がすんだのでもあろうか、明子のとなりに眠ったように静かだったが、明子の足の先きに見えている向いのベッドにいるひとりは、陣痛のうめきを上げていた。助産婦や看護婦や五、六人が

ベッドの周囲にもの慣れた静かきで動き、それが明るく光の中で、この部屋だけに継続された活気を浮かび上らせている。

明子のところでも、看護婦のひとりが明子の腹部に聴診器を押しつけて、その上にかがみこむようにして耳を当て、胎児の心音を聴きはじめた。聴診器は明子の腹部の皮膚に強く当たって痛い。

「お痛みになります？」

もの柔かだが抑揚のない事務的な声を下の方に聞いて、明子は、ええ、と答え、天井に目を見開いている。

ベッドへ上るとき、看護婦の手で解かれた腹帯は、輪に結んで枕の上の棧に通してある。明子の両腕はその腹帯の端しにすがって力をそこに支えていた。明子の陣痛はまだ間をおいていたが、陣痛のたびに彼女にはもう、やがてそこに声を上げる赤児への感情が、あるおもいでこみ上げてきていた。それはこれから、その赤児と共同でひとつのことを為し遂げるのだ、というひそやかで力づよい提携の実感であった。

彼女は今ここにひとりだったが、ひとりであるということが赤児へのそういう共同のおもいを強めてもい

た。十条のわが家では、数え年三歳の長男が、手伝いの少女の辰子と二人だけで、もう眠ったであらう。そして夫の広介は、明子が今夜ひとりの出生を為すことを知らずに、王子警察の留置場の板の上にいるはずだった。

向い側のベッドの周囲では、やがて出産の準備にもものしくなった。医師や助産婦や看護婦に取り込まれ、産婦は高くうめいた。助産婦のそれを整え、励ます声。

「はいッ。もうちょっとですよ！」

産婦の力む声が泣いてふるえる。明子の枕の上からその出産の場が見えていた。産婦の年齢はわからな。い。が、その泣いてふるえる陣痛の声は精根こめて可憐であった。

明子の胸に、女というもののいとしさがこみ上げてきて、彼女は自分も泣き出し、それを手で蔽うてすすり上げた。自分も今、その場にいるために、同感のすすり泣きは優しく彼女の心をひたしていた。

助産婦たちのせわしい言葉につれて、裂くような嬰兒の産ぶ声があがり、それは部屋の中に満ちた。

あつ、今、こうして一人の誕生があったのだ！

純粹にそれだけの感動が明子の胸にふるえ、そのおもいのうちに彼女自身の陣痛がわき上ってくる。

ああ、もうすぐ！

そこに予想される期待で、彼女は枕の上の帯に両手ですがり、苦痛に堪えて息を張った。

夜更けて彼女は女兒を分娩した。最後の一息にどろりと重たい流れを感じたとおもうと、そのあとに明子はわが子の泣き声を聞いた。

それは自分が生んだ、というよりは、赤児自身の懸命さで生まれ出たようにおもわれ、明子はその愛らしさに涙ぐんだ。

「女のお子さんですよ」

助産婦のそういううちにも、赤児は明子のももの間で泣きつづけ、ひたひたと小さい足の平で母の太ももを蹴った。小さな、小さな、柔かい感触。それははじめて外界で母と子の間に行われた接触であった。はつと明子はその感触におもいを据え、ほほ笑んだ。

私の太ももを、子どもの足が蹴っている。この瞬間のつながり、と明子はそのにまだ自分と赤児との肉体が結ばれたままでのを感じ、共同の事業を為し遂げたわが子へのおもいに、彼女は胸の中でそれを語り

かけていた。

赤児は助産婦の手で別室に連れ去られ、明子はそのあとに男の医師の手当を受けていた。明子は出産のたび毎に異常出血のくせがあつて、今も出血がとまらないのであつた。太い注射針が太もみにさされ、高く持ち上げられたガラス罎から多量の液がおりり込まれていた。その長い時間を堪えていることは疲労した身体に苦痛であつたが、明子はそれでもう、小さなものをおくり出した安心で、自分自身の危険には気づかないのであつた。

ようやく手当が終つたとき、医師は彼女の顔をのぞいて、おこつたように言つた。

「もう、あなたは、子どもを生んじや駄目ですよ。今だって、もう少しで致死量に近い出血ですよ。出産が重なる毎に子宮の収縮が利かなくなりますますからね。今度お産をしたら、あなた死んでしまいますよ」

「ああ、そうですか」

疲労した頭が鈍くしか反応を示さない。明子は微笑して医師を見上げていた。彼女には今は、さっきからの医師や看護婦の真剣な手当の不安も、伝わってはいなかった。赤児が彼女の太ももを小さい足で蹴り上げ

ているとき、多量の出血が自分の体内から排出されていたこわさに彼女の気づいたのは、もつとあとでだった。

彼女は赤児の顔を見たい、とおもつた。赤児は別室に連れ去られたままだった。二年前に、やはりここで長男を生んだとき、湯で洗い、産衣をきせられた嬰兒は、看護婦に抱かれて、母の前に顔を見せに連れてこられたのだ。

その手順が今夜はふまれていない。明子は、あの太ももを蹴つた女兒の顔を見たいとおもつた。遠慮がちな明子はそれを押えたまま、うとうとと夜を明かした。

明子の疲労した頭脳は、まだ赤児を見ないというところで、それそわと不安にとらわれはじめた。わが子がどこかにまぎれてでもいるような不安は、疲れた神経のせいだった。朝になって明子はたまりかねて言い出した。

「私はまだ、赤ん坊を見ていないんですけど」

「おや、そうでしたか」

若い看護婦はのどかに答えて別室に引返して行き、そして赤児を抱いて明子のベッドにもどつてきた。

「はい、御対面。坊ちゃんですよ」

明子は、そのとたんに、さっと顔に血ののぼるのを
はつきりと感じた。

「あの、私は、女の子を生んだはずなんですけど」

「あら、そうですか」

と、また看護婦は同じ言葉を至極平静に言つて、ゆ
っくり引返して行つた。明子の胸はあわただしくかき
乱されている。私の生んだ赤ん坊は、どこにまぎれて
いるのだらう。同じ日に、時刻もあまり違わず生まれ
て、ひとつ部屋におかれてゐる嬰兒は見分けがつか
なくなるのではなからうか。

このベッドの上で生まれ出てきて、明子の太ももを
蹴つたときでさえまだ、たしかに自分の肉体とつなが
つていたわが子が、今はそのつながりの証明を失つて
しまったような不安におそわれていた。が、それは赤
ん坊が間ちがわれたのではなくて、母親の方を間ちが
われたのにちがいない。まもなく抱かれてきた嬰兒
は、明子の用意したピンク色のガーゼの産着をきてい
た。

「柿村さんですね」

看護婦は明子の姓名をたしかめて、抱いている赤児

の顔を明子の上に見せるようにした。

「ああ」

明子はひとり言につぶやき、素早く赤児の顔を点検
するようにつめめた。目鼻立ちの小ちんまりした赤児
は、数時間前に生まれてきてもうそこに、ちゃんと眠
つていた。

「どうもありがとうございます」

看護婦に礼を言いながら明子は、心の中で、まあ、
口が小さいからいいわ、とつぶやき、赤児の顔をしら
べた安心にほほ笑みを浮べていた。似ている、とも見
えぬながら、それはたしかに明子の生んだ女兒にちが
いなかった。もうその顔は忘れない、と彼女は連れ去
られる嬰兒の顔を心に追つていた。

長男をここで生んで、最初にその顔を見たとき、長
男の顔は鼻も口も大きくて、顔全体の中から道具立て
がはみ出しそうにさえ見えたとにくらべて、今度の女
児は、鼻も小さく口も小さかった。まあとにかく口が
小さいから、と、女の児の顔立ちにそれが尋常におも
えて、明子はようやく落ちついていった。

無事にすんだ、という安心さえ自覚されてはいなか
った。ただ彼女は事態が一步前進した、というような

感じがしていた。出産をま近かにむかえて、彼女の周囲はこの二十日間のうちにあわただしい変化をかぶっていた。夫の広介が外出したまま帰らなくなったのは二十日前だった。明子自身も加わっている文化団体の主要な働き手たちが一斉に検挙され、広介も会合へゆく途中から連れさられていた。検挙をのがれた数人は、身体を隠したという。それは彼らの運動の大きな変化だった。明子自身、あらゆる事態の予想に身構えねばならなかった。このとき出産を控えていたのだ。今それは無事にすんだ。が、そのあわただしい条件の中だから、無事にすんだと安心するよりは、赤児をおくり出し、自分が身軽になったことに事態は一步前進した、と感じた。

この病院の中では、明子はひとりの産婦にすぎない。異常出血を止める処置の注射のあとがいつまでも左ももで痛んだ。昼近くなって、無力な産婦である明子は、看護婦に抱きかかえられて、広い産室のベッドに運ばれていった。

産室はひとつの部屋がはるかに見渡せるほど広かった。長方形のその室の両側に、ずらりとベッドが並んでおかれていた。明子の移し変えられたベッドはその

まん中へんの壁ぎわにあつて、左となりのベッドでは若い母親が赤児と枕を並べていた。右側のベッドには中年の女がいて、何故か彼女のそばには赤児がいなかった。あとで分ったことで、右となりの中年の女は、異常につよいつわりのために、母体があやうくなくなって入院しているのだった。彼女だけがこの室では異例だった。ずらりとどこまでもつづくようにさえ見えるすべてのベッドで、みんなそのひとつひとつには、一人の女が一人の赤児を抱いて寝ている。明子のところからそれがみんな眺められるわけではないが、その想像をすると、それは壮観にちがいないとおもわれた。明子はここに、施療で入院している。広介の高等学校時代の友人がこの帝大病院に働いていて、その世話で施療の計らいがされていた。その広い産室のベッドの産婦がみんな施療であるのかどうかはわからない。が、施療産婦の入院したこの部屋は有料だとしても最下等であるにちがいはなかった。けれどもベッドこそずらりと並んでいるが、部屋に暗いかげはなく、清潔であった。産婦と嬰兒が、そこにいるからにちがいない。

外には満州事変から上海事変につづく空気が重く垂れ込めている。しかし、ここではたくさんの赤ん坊が

生まれて、すべてのベッドで一人ずつの母親がわが子を抱いて乳をふくませているのだ。その対比が明子の胸に一層この雰囲気を感じ動的にしていた。ここでは生活の色合いの相違さえ、産婦と嬰兒という共通の本来の姿にかき消されて、ただ乳の匂いと消毒薬のにおいがするだけ。明子も今はそこに腰を据えている。

やがて明子のベッドにも、ピンク色のガーゼの産衣をきた女兒が、看護婦の手で差し入れられていった。

「お前か」

明子のベッドの上だけに限られた母子の世界で、赤ん坊の顔を眺めた。ベッドの上だけ、そこでは、単純に、自分と赤児だけがあつた。いつまでもそのままでいたいほど、そこには安らかななごみがあつた。

室の中は、廊下をへだてた外の、春の陽光をのぞんで明るかつた。昨日女兒の生まれたのが四月十日。帝大病院の構内には、桜も咲いているかもしれない。あちこちへ見舞い人が訪れはじめている。そして明子のところにも、手伝いの少女の辰子が赤い頬をして、長男の行一を連れて近づいて来た。数え年三歳の行一は毛糸の服をきて、慣れぬあたりの空気の中で母親だけを目当てだというようにまっすぐに明子のベッ

ドのそばに来ると、そこにすでに知らぬ赤児が寝かされているのを見て、不当に何かが犯されたような気持ちの表情をした。かねて神経太く、泣きも笑いもあまりしない男の子だが、その時彼は、

「僕が寝るウ」

と、主張するようにいい、赤児を押しどけるようにして、ベッドの端しに片足をかけてよじのぼろうとした。

はっはっは、と明子は笑い出して、

「赤ちゃんよ、行一。うちの赤ちゃんよ」

行一をなだめながら、明子は辰子にむかつて言っていた。

「新聞、持ってきた？」

それは昨日うちを出る時から、頼んでおいたことだった。

行一は明子になだめられるとすぐ、母のそばを自分ではない小さいものが占めていることにあきらめた。が、わざと赤ん坊は見えないというようにそのへんをちろちろと歩きまわった。

明子は辰子から受け取った新聞を枕の下に差し入れながら、顔はもう辰子に向けて頼みこむような視線で

いていた。

「ねえ、辰ちゃん悪いけど、あんた、柿村さんのところへ知らせに行つて」

広介の姓をいうのが習慣になつていて、柿村さんといい、その頼み込む調子の語尾をやわらかく上へはねた。赤ん坊をのぞいていた辰子は明子を見て、持ち前の鼻にかかった高い声で答えた。

「はい。行つて来ます」

柿村のところといえは警察である。辰子の即座の返事は気丈だった。十七歳のこの少女は日ごろから役に立つ娘だった。

「悪いねえ。行一を連れて行きなさい。それに赤ん坊が生まれたんだから大丈夫だよ。すぐ逢わせてくれるよ。道順はおしえて上げるからね。帰りに寄つて行つてちょうだい」

「ええ、わかるとおもいますわ。大丈夫です。赤ちゃんの生まれたこと私、話して来ます」

辰子は赤い頬をして、小鼻をいからせた。彼女も氣負っているのにちがひなかった。このごろからの柿村の逮捕と、昨夜の明子の出産、小さい行一の世話などが今は辰子ひとりにかかつていた。その異常な状態に

否応なしに巻き込まれて彼女も身がまえている。

明子は辰子の顔を目で呼んで小声になり、柿村のいる王子警察への道順をおしえた。

「そしてねえ、赤ん坊の名前を考えておいて下さいっていつて来て。それからもうひとつ」

と明子はいいい、この構内の神経科に入院している実父のところへも知らせを頼んだ。丁度数日前から、実父は毒に犯された脳神経の治療のためここに入院しているのであった。

「そいじゃねえ、私のところはいいいから、もう行つてちょうだい。頼んだわね」

「はい、それじゃ行きます。行ちゃん、もう帰りますよ」

昨夜から行一も辰子と二人きりなのだ。行一もそれを承知しているように、もう母にはまつわりつかずに、すぐ辰子に手を引かれて部屋を出た。明子は枕越しに小さいうしろ姿を見送つて、涙っぽくなりそうない気持を押えた。

どこかのベッドで赤ん坊が泣き出した。すると誘われたように、あちこちで同じように泣き出し、この広い部屋の中が赤ん坊の泣き声でいっぱいになった。

明子は自分のそばでも泣き出した女の子を抱き上げて乳をふくませた。

「お乳は出ます？」

通りかかった看護婦が明子の胸元をのぞいていった。

「あんまり出ないようなんですけど」

明子は看護婦の顔を問いかけるように見上げた。今度明子の乳はちっとも張ってこない。明子は先程からそれが不安になっていた。

が、看護婦は聞きながす調子で答えた。

「今に出て来ますからね。出なくてものませていらっしやいね」

「はい」

答えながら乳首を吸っている赤児をのぞいた。赤児はじれたように乳首をはなして泣き出した。

私の乳は出ない！ 明子はがく然としたようにそうおもった。それは予想しないことだった。このあいだからの心配で、私の乳は出ないのであるうか。明子はおもいがけぬ打撃に、暗い目をした。ミルクを買わねばならぬようなことにもなれば、今の彼女にそれは経済的に大変な負担であった。それにこのごろの人工

栄養は赤児の發育にも十分でなかったのだ。

幾度乳首をふくませても、赤児はやがて悲しげな声で泣き出す。

ああ、乳が出ない。そくそくと明子自身が泣きたくなっていた。肉体への何とあからさまな影響だろう。

彼女は唇をかむようにして泣きやまぬ赤児をゆすり上げ、通りかかった看護婦にミルクを頼んだ。

「くせになって、お母さんの乳をのまなくなるんですよ」

看護婦がそういいながら持ってきたミルクを、赤ん坊は吸って、ようやく眠った。

私は打撃を受けている。乳房をもみながら、この場での母と子だけのなごみの中で、自分につながる外を感じた。そして彼女は看護婦の目をぬすむようにして、枕の下においた新聞を取り出した。新聞の社会欄は、このごろ連日、プロレタリア文化連盟関係の検挙の記事を大きく扱っていた。明子の今ひろげた新聞にも、明子の知った顔の写真が上から下へ六、七人も並んで載っていた。その写真の顔は明子の所属する作家団体の仲間ではなかったが、それだけ検挙が広いことを語っていた。明子がいつも一緒に仕事をしていた滝井